回りて向かう　神様と仏様の違いとは？

この寺報で前々から申し上げている通り、護国寺の宗派は本山修験宗（ホンザンシュゲンシュウ）であります。簡単に言いますと本山修験宗は天台宗系の修験道ということになりますが、そもそも修験道とは古（イニシエ）より神仏習合または神仏混淆（コンコウ）という基本概念を軸にした民間信仰であります。今回は、そういう意味合いに於ける『神仏』つまり神様と仏様の違いについて、改めてお伝えいたします。

・日本の神様は唯一絶対神ではない

大前提として、そもそも日本で親しまれている神様と欧米や中東で信仰されている神様は実は全く概念が異なります。日本は山河草木が織りなす自然の恵みを土台とし、且つその中で営まれる豊かでありながらも厳しい自然の多面性が八百万の神々として日本人の感性の中に無意識に根を張っています。

一方、欧米で広く信仰されているキリスト教や、中東諸国さらには中央アジアや東南アジアで信仰されているイスラム教に於ける神とは、旧約聖書という共通の聖典に裏打ちされた神であり、その神は八百万の神々のように多神ではなく、『唯一絶対の神』なのです。参考までにお伝えすると、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つの宗教は先述した通り旧約聖書を共通の拠り所としており、別名をアブラハムの宗教として原則的には同一の唯一絶対神、つまり同じ神様を信仰しています。その神様は全知全能でありこの宇宙の創造主であるとされ、その御名が三者三様にヤハウェと呼ばれたりゴッドと呼ばれたりアッラーと呼ばれたりしているのです。

話は戻って、初詣や七五三のお参りなどで我々が意識する日本の神々は雨之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）に始まり、イザナギ・イザナミの尊の国造りを経て大国主神（オオクニヌシノカミ）に代表される国津神（クニツカミ）、天照大御神（アマテラスオオミカミ）に代表される天津神（アマツカミ）の二局に体系化され、そして天孫降臨から神武天皇の東征によって歴代天皇と結び付けられ、やがて中世から明治にかけて日本の民族宗教『神道』の神々として意識付けられました。

・明治までの日本は神仏習合だった！

上で、「意識付けられた」と述べているのには訳が有りまして、実は奈良時代から明治までの日本は、神と仏を現代のように意識的に分けることを積極的にはしなかったようなのです。しかし、このことをイメージするのは意外と難しいのです。なぜなら、我々現代人は『日本土着の神道と大陸からもたらされた仏教』という二つの宗教が互いに影響しあいながら現代まで別々に続いていると認識しがちです。しかし実際には、西暦５００年前辺りから非公式に伝播（デンパ）していた仏教に対する一般レベルでの理解は、仏という存在があくまでも『外来の新たな神』として従来の土着の神々に加わったとするものであり、つまりそれは日本の風土的民間信仰の新たな神として仏が参入したという言い方が適切かもしれません。

ですが、一般民衆の中で数百年続いたその理解は、平安時代に空海が当時の最先端の仏教であった『密教』を質を落とさず日本に取り入れたことで変容します。その理解の変容とは、縄文時代から続いてきた風土的民間信仰を『日本の密教』として大きな器で捉え直すことでした。

それによって、当時一般的に親しまれていた神々から記紀神話に登場してきたそうそうたる神々でさえも、密教の広大な宇宙観の中で同じく捉え直されるようになってきました。その最たる例が『本地垂迹（ホンチスイジャク）』という新たに登場する概念です。

本地垂迹とは、密教の宇宙観に於ける仏が、日本の土着の神々の姿を借りて現れるとする考え方で、これによって日本の神々は仏教の中の密教という宇宙観の中で再配置されました。以後、明治初年の神仏分離令を経ても尚、本地垂迹に代表される神仏習合の名残は日本文化の至る所に顕著です。例えば、四国８８ヶ所霊場や全国各地の有名寺院の多くが、同じく有名な神社と境内を隣り合わせていること。これは、かつてそれらが寺社一体で信仰され、また機能していた証です。

・結局、仏様とはなんなのか？

どの宗派に於いても、仏様＝お釈迦様＝悟った人という理解が何よりも大前提です。ですが、成り行きを簡単に言うならば、インドに於ける西暦０年頃からの仏教は次第にヒンドゥー教の思想を取り入れ、やがては密教として生き永らえ、日本の平安時代の宗教界はもろにその影響を受けました。

ですが鎌倉時代前後になってくると、強烈な使命感とカリスマ性をもった現代の伝統仏教各派の祖師達が登場し、それぞれが経典や禅に基づく教理の差別化を繰り広げ、その中で仏の概念は様々に拡張されてきましが、「我々も皆で仏を目指そう！」とする志はどの宗派に於いても同じです。